

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Beyond dichotomy : a quiet challenge of John Okada's No-No-Boy

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠田, 実紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/429">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/429</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 二分法を越えて John Okada, *No-No Boy*の静かなる挑戦

篠田実紀

優勢なある集団が別の集団を支配する際、有効な手段のひとつが“stereotype”の形成である。支配集団が自己の支配に好都合な被支配者集団のイメージを作り出し、しかもそのイメージが後者にとって適度な好感をもって受け入れられる時、前者の支配は成功する。アメリカ合衆国がアジア系集団を支配してきたのはこの方法によってであった。19世紀に渡ってきた中国系や日系の移民たちは、低賃金で雇われ、アメリカの白人層の雇用を脅かしたため、当初は“yellow peril”と呼ばれて危険視された。しかし、アジア系の stereotype は次第に変容し、国家に対して忠実かつ従順で、国家を混乱させることなく勤勉と自助努力で困難を克服するという“alien but ‘safe’ minority” (Jinqi Ling, 361) としての別の側面がクローズアップされるようになる。アメリカ社会の中でしばしば中国系と日系は混同されてきたが、太平洋戦争でアメリカの敵国となった日本に起源を持つ日系人は、同盟関係にあった中国系人とは異なる運命をたどる。戦争によって、彼らには、自分達が国家に対する脅威ではなく、中国系同様国家に忠実な民族であることを新たに証明する必要が生じた。彼らの多くは、戦前以上に国家に服従することによって安全な民族として国家に認められようとし、特に日系2世の男性の中には、従軍という形でアメリカという国家への忠誠を示す者が多かった。

日系人の信頼がようやく戦前に近い水準まで回復した1960年代、黒人の公民権運動の時代になると、それ以前にアジア系に対して形成されてきた忠実・勤勉・従順というより好ましい側面の stereotype は、“model minori-

ty”と表現されるようになる。しかし、肯定的な model minority というイメージは、白人の支配に抵抗の声をあげる黒人を悪しき集団と印象づける効果を狙って、白人の立場から一方的にアジア系アメリカ人に押し付けられた神話である。この神話の巧妙な点は、それが肯定的な評価であるために、アジア系人の方から抵抗しようという危険を冒す気を削ぐという事だ。かくしてアジア系アメリカ人は沈黙し、甘んじて stereotype を受け入れ、白人層は彼らを優秀な二級市民という立場のまま支配し続ける事ができる。そして、model minority らしからぬ反抗の声をあげた者に対しては、支配者側が直接罰する労力を使わなくとも、アジア系の集団内からの圧力で沈黙させるという結果になる。

文学の世界においても、1970年代までは、同様の model minority 神話がまかりとおり、アジア系アメリカ文学では model minority という “good subject” を扱った作品のみが好んで出版され、主として多くの白人読者を確保して経済的に成功してきた。その陰で、model minority からはずれた “bad subject” をテーマとした作品は、いかに真実であっても、いかに重要な問題提起をしていても、日の目を見ない待遇を受けていた (Viet Thanh Nguyen, 144)。本論文では、そのような “bad subject” を扱った問題作のひとつである *No-No Boy* という小説をとりあげ、長らく注目されなかったアメリカの日系人社会の陰の部分について考察する。

## 1) 救出された小説

日系アメリカ人による最初の長編小説 *No-No Boy* は、公民権運動が盛んになる前の1957年に出版された。日系アメリカ人2世の青年をとりまく戦後間もない日系人社会の一場面を描いたこの小説は、出版後15年を経ても初版1,500部を売り切ることなく、作者 John Okada の存命中は “forgotten work” となっていた (Frank Chin, et al., xxxvi)。小説中に “Negro” や “Jap”

という差別用語が多発することが示すように、公民権運動以前の1950年代は、人種差別がまだ公然とまかり通った時代である。白人が非白人による小説に価値を見出すことを出版社が期待したとは思われない。しかし、出版社の Charles Tuttle の思惑を完全にはずれたのは、作者とその作品が属し、最も熱意をもってこの作品を歓迎すると予測された日系アメリカ人のコミュニティから事実上拒絶されたという事実であった (Chin, et al., xxxix)。その理由は、この小説のテーマが model minority の範疇からは大きくはずれるからである。Elaine Kim が指摘するように、この作品も、そこに登場する日系人も、“patient, law-abiding, hard-working, docile model minority” のイメージにはほど遠い (Kim, 156)。アメリカの敵国民であった故の厳しい戦中戦後を乗り越えてようやく社会に受け入れられるようになった日系アメリカ人達にとって、忘れてしまいたい辛い過去へとひきもどすようなこの作品に飛びつくことが躊躇されたということは想像に難くない。

*No-No Boy* を発掘したのは、中国系の Frank Chin や日系3世の Lawson Fusao Inada など、公民権運動の影響を受けた次世代のアジア系アメリカ人作家であった。*No-No Boy* の一部は、Chin や Inada らによって1974年に出版された *Aiiieeeee!: An Anthology of Asian-American Writers* と題するアジア系アメリカ人の文学選集の中に再登場した。この本の“Preface”と“Introduction”では、この選集が、それまで白人中心の出版業界によって世に出されたアジア系アメリカ人の作品が作った stereotype を破壊し、真に価値あるアジア系アメリカ文学を紹介する意図で編まれていると述べられている。太平洋戦争中のアメリカでは、中国系アメリカ人は、犬舎で飼われるペット (“America’s pets, kept and groomed in kennels”), 日系人は檻に閉じ込めなければならない狂犬 (“mad dogs who had to be locked up in the pounds”) のような存在だったと Chin らは述べる (Chin et al., p. xv)。この時代、アメリカ本土在住の日本人は危険な民族として政府により僻地のキャンプに収容され、同時に中国人は、友好的なアメリカの味方として認識されるようになって

た。しかし、中国人もまた、犬舎の外に出て自由の身となったわけではない。Chin らによると、この時代に出版された Pardee Lowe や Jade Snow Wong など中国系を中心とするアジア系作家の作品は、飼い主に媚びるペットのように、主たる読者である白人層の好みに合わせ、白人の支配に都合のいい世界を描いた。これらの作品は、“good, loyal, obedient, passive, law-abiding, cultured” であるという中国人の stereotype を作り上げた (Chin, et al., x)。戦後のアメリカ社会は、檻から解放された日系人をも、アジア系アメリカ人という集団として同様の従順で忠実な stereotype に組み込もうとする。たとえば、*No-No Boy* と同時期に日系二世女性 Monica Sone が著した自伝 *Nisei Daughter* (1953) は、多くの読者を得た。Jinqi Ling は、この作品が戦中の日系人収容の苦悩を描きながらも、アメリカの人種差別に対する批判を欠く点に触れ、この自伝を“explanations of the exotic but non-threatening otherness of Japanese American life to mainstream readers, and accounts of successful transition into the mainstream” と評する (Ling, 362)。更に、体制順応型のアジア人は、“good guy” として、アメリカ政府に従わず抵抗する他のマイノリティ集団を“bad” に見せるという役割を演じてきた (Chin, et al., xxii)。

白人好みのアジア系アメリカ文学に現れるコミュニティは、白人社会から切り離されて自律的に存在する別世界で、アメリカ生まれの作者達が直接体験したこともない何世紀も前の古い文化を基盤とする社会であった (Chin, et al., xxiv)。アメリカ社会は、アフリカから奴隷として連れて来た黒人からは、彼らのアフリカ文化を完全に剥奪することによって力づくで支配しようとしたが、それとは対照的に、アジアの古い文化にはアジア系アメリカ人の“inner source” としてそれなりの価値を与え、彼らの不満を封じ込めることによって支配しようとした<sup>1</sup>。ただし、その文化は、アジア系アメリカ人

---

1 本来であれば「アフリカ系アメリカ人」という呼称が妥当であるが、本論文では公民権運動以前に書かれた小説を扱うため、当時一般的であった「黒人」という呼称を用いる。

自らが主張する文化ではなく、白人の基準に合格するという条件で温存を許されたのである。更に重要なのは、アジア系アメリカ人自身が、白人優越主義の“racist love”により一方的に造り上げられた stereotype に違和感を感じつつ、自分たちは他のマイノリティよりはままだと白人に認められていることに満足し、抵抗をせず、その stereotype を黙って受け入れてきたという傾向である。そして皮肉なことに、白人の“racist hate”に対して“noise”を挙げた黒人は、白人の文化とは別個の独自の“black culture”という文化領域を築くことに成功した反面、白人至上主義に迎合し、その“racist love”に甘んじて“silence”を保ったアジア系アメリカ人の文化は、アメリカの中では常に“stranger”の域を出ることはなかったと Chin らは指摘する (Chin, et al., xxv-xxvi)。どんなに肯定的な評価を得ても、彼らの人種集団は、白人同様の人間とはみなされず、犬舎で飼われる従順なペットのように、アメリカ社会に組み込まれることのない他者 (other) であった。

Frank Chin らが *No-No Boy* を評価した最大の理由は、50年代に日系人がこの作品に背を向けたまさにその理由と同じで、この作品が model minority という stereotype に従わなかった点にある。そのことは、まず主人公とタイトルが示している。主人公 Ichiro Yamada は、戦時中アメリカのために戦う軍人となることを拒否して刑務所に服役するという不名誉を背負った若者であり、しかもその不名誉な立場を示す“*No-No Boy*”が作品のタイトルになっている。この小説の重要性のひとつは、Ichiro の寡黙性と、執拗なまでの粘着性で綴られた内面描写の共存にある。彼は、強く饒舌に主張する性格ではなく、自信を喪失した寡黙な人物であるが、他の登場人物には直接語られる事のない彼の心理の核心部分は、しばしば一人称で「意識の流れ」形式で表現される。そして、小説の読者にのみ明かされるこの内面描写が彼の率直な心情を物語る。Ichiro の心中に渦巻く複雑な疑問や葛藤を読むことにより、心情を実際の会話の中で語ることを主人公に許さないのが、アメリカの裏切り者というレッテルを貼って彼を疎外する日系人社会——ひいてはア

メロカ合衆国——からの心理的圧力と、自分が悪いと責め、社会の非を問うことのない Ichiro 自身の相互作用であるということがわかる。

*No-No Boy* の主要な舞台のひとつである Seattle の Chinatown も、決して model minority の生活基盤として誇るべき場所としてではなく、Chin 達の指摘するとおり、きな臭く怪しげな “predominantly male” の世界として描かれる (Chin, et al., xxxii)。ここは異国情緒にあふれた食材を女性達が買い求める健全な活気に満ちた stereotype の Chinatown ではなく、独身の中国系と日系の男たちが集まり、煙草をふかし、ウィスキーを飲みながらポーカーや玉突きに興じる退廃的な盛り場である。そこには、アメリカ合衆国の表舞台に立つことを許されない若者たちの欲求不満が鬱積し、争いと犯罪の臭いが立ちこめる。ならず者として登場する Freddie や Bull や Taro はもとより、比較的 model minority に近い好人物として描かれる Kenji でさえ、GI Bill を受けても大学の講義には出席せず、駐車時間超過やスピード超過の違反チケットを破り捨てる。旧来白人に好まれたアジア系の文学に見られるような、アメリカの価値観を無批判に受け入れ、法律を遵守する真面目なアジア人の姿はほとんど見られない。ここにいる 2 世の男達の多くは、定職を持たず、親の金で遊んでいるが、親に対して感謝や尊敬の念は薄く、家に戻るの食べて寝る時だけだ。

Chin 達は、*No-No Boy* というタイトルの作品を書くことにより、作者は、“No’ to American and ‘No’ to Japanese” というメッセージを送り、“Japanese” でも “American” でもない全く新しいアイデンティティを模索していると論じる (Chin, et al., xxxv)。主人公のみならず、登場するすべての日系 2 世は、“Japanese” でも “American” でもない。属するコミュニティと容姿が Japanese であるものの、彼らは朝食には目玉焼き、昼食にはハンバーガーを食べ、車に乗ってダンスを踊る。日系人どうしても気に入らない相手を罵る時に “Jap” という表現を使うことからわかるように、Japanese の要素は極力排除してより American になることを望む。しかし、

このようにアメリカに愛着を抱き、American であることに憧れながらも彼らが白人と同等の評価を受けて社会に認められる機会はない。彼らはそのことに憤っているが、その怒りを直接向けるべき対象に向けられずに更なるいら立ちを感じている。

They walked down the ugly street with the ugly buildings among the ugly people which was a part of America and, at the same time, would never be wholly America. (Okada, 71)

彼らは、アメリカでありながら “wholly America” ではない場所で閉塞した生活を続けなければならない。同時に、悪しき民族という汚名である “Japanese” というアイデンティティをふりかざすこともできない。これが白人社会の身勝手な model minority 幻想の背後に隠れた日系2世とそのコミュニティの実像である。50年代の日系人集団が恥じて示そうとしないこの実像を、Okada は前面に押し出している。

第2次世界大戦終結後、国際社会は冷戦時代に突入し、新たな二分化の緊張感を膨張させていった。1950年代のアメリカは、対外的・国内的両面において二分法に支配され、対外的には、冷戦構造下で常に共産主義という外からの脅威があり、国内に目を向けると、支配者層の白人と黒人を中心とする被支配者層の有色人種という人種的分断による弊害が徐々に表面化していった。No-No Boy は、第2次大戦以降、敵か味方か、という二分法を使って問題解決を図ってきたアメリカ社会の基準からは、大きくはずれている。Stan Yogi は、“Okada explores the grey area between polarized definition of ‘Japanese’ and ‘American,’ individuality and community, assimilation and cultural maintenance.” と指摘する (Yogi, 137)。“Japanese” としてキャンプに収容され、“American” として戦争に行くという運命を背負った作者 Okada は、“Japanese vs. American”, “No-No Boy vs. veterans”, “Is-sei vs. Nissei” などの対立の構図を示しつつも、二分法や二者択一で割り切



れない世界を描き出す。主人公 Ichiro をはじめとする登場人物に対しても、単純ではなく多面的な性格付けが行われる。以下、この小説の、Seattle の空のように白黒つかない灰色の世界に示された多角的な視野を追いながら、主人公を通して作者が示そうとした可能性を探ってみたい。

## 2) No-No Boy / 退役軍人

本論文で取り扱う作品のタイトルの “No-No Boy” とは何かを考えるためには、戦時中の日系人収容に注目する必要がある。1941年12月の日本軍による Pearl Harbor 攻撃と日米開戦に伴い、翌年2月、Franklin Roosevelt 大統領は Executive Order 9066 を発令、アメリカ本土の12万人の日系人は立ち退き (evacuation) と転住 (relocation) を余儀なくされ、偏狭の地のキャンプに収容されることになる。<sup>2</sup> キャンプに収容された2世の中には、主人公の Ichiro のように、これから社会人になろうとする20代前後の若者が多数いたが、収容された者のうち後の人生に最も強いインパクトを受けたのが彼らであり、特に男子にとっては、アメリカ軍として戦争に行くか刑務所に行くかという過酷な選択が課せられることになる。

収容により、アメリカ生まれではないためにアメリカ国籍を取得できず、日本語を話す1世と、アメリカで生まれ育ち、英語を話し、アメリカ人であると意識してきた2世の間に潜在していた溝が顕在化するようになり、家族が崩壊する結果となった。Harry Kitano は、その崩壊の原因として、キャンプでは共同の食堂で食事をするのが義務づけられたために、使用言語の異なる家族単位ではなく同じ言語を話す同世代の仲間集団で食事をするようになり、同世代集団の基準で行動するようになったこと、そして、以下に示すように、親の意向に逆らって軍に志願する2世が現れたことと、“loyalty question-

---

2 日系人が収容されたキャンプの正式名は「転住センター」(“relocation center”)であるが、本論文では一般的に用いられた「キャンプ」という呼称を用いる。

naire”に親子が異なる答を書いたということを挙げる (Kitano, 155)。

1942年、アメリカ政府は、ヨーロッパ戦線に送り込むべく、442nd Regimental Combat Team と100th Battalion という日系人のみによる戦闘部隊を結成する。キャンプに収容されていた多くの2世たちは自らのアメリカに対する忠誠心 (loyalty) を示すべく、軍に志願した。更に1943年、収容所の17歳以上の日系人は、“Statement of United States Citizenship of Japanese Ancestry” と題された一連の質問、通称 “loyalty questionnaire” への回答を求められる。この質問群の中で特に物議を醸したのが、アメリカ軍に入隊する意志の有無を問う第27問と、日本の天皇への忠誠を捨ててアメリカに無条件の忠誠を誓うか否かを問う第28問であった。Yasuko Takezawa によると、収容された日系人78,000人にこの質問が与えられ、回答した75,000人のうち65,000人は双方に “Yes”, 6,700人が双方に “No” と答えたということである (Takezawa, 99) から、9割近い圧倒的多数が “Yes-Yes” と答えたことがわかる。これらの質問の双方に “Yes” と答えた者は “loyal”, いずれか一方にでも “No” と答えた者は “disloyal” と分類され、後者のうち男子が “No-No Boy” である。彼らは、アメリカに対する忠誠心のない者として、家族と引き離され、危険な日本人と見なされる者を中心に収容した Tule Lake のキャンプに転送された。即ち、“Yes-Yes” と答えた者は味方の “American”, ひとつでも “No” と答えた者は敵の “Japanese” と見なされ、“Japanese-American” という範疇の存在そのものが否定されたと言ってよい。

しかし、“Yes-Yes” の答がすべてアメリカへの忠誠心から出たものとはかぎらず、同様に、“No” という答がアメリカへの敵対心に直結していたわけではない。小説 *No-No Boy* の中で Ichiro が他の No-No Boys と共に法廷に立った時を回想する場面では、アメリカへの忠誠心を持ちながらも、自国民であるはずの自分たちを砂漠に収容した国のために戦うことへの疑問や、自分と血のつながった親族に銃を向ける可能性への抵抗感など、単純に

“Yes”と“No”では割り切れない彼らの心情が明らかにされる (Okada, 31-33)。“Japanese”であるためにキャンプに収容されたのに今度は“American”として国を守れと指示されたことに対する戸惑いの中で、軍人となった者の中にも No-No Boy と同様に悩んだ者が多数いたはずである。<sup>3</sup>

*No-No Boy* の作者 John Okada 自身は No-No Boy ではなかった。彼はアメリカ軍に志願したが、ヨーロッパ戦線では戦わず、太平洋戦線の後方支援として、日本語の無線の翻訳や、日本に降伏を呼びかけるビラ作成などの任務に当たった。No-No Boy ではない Okada が、Ichiro Yamada という No-No Boy を主人公とし、この人物の視点を中心に物語を作り出したということには深い意義がある。Stephen Sumida は、この小説では、一見 No-No Boy と退役軍人、即ち“disloyal Japanese-American”と“loyal Japanese-American”は対立しているが、実質的には、アメリカ社会に受け入れられずに苦しんでいるという点では、両者の間に相違はないと論じる。Sumida は、共に No-No Boy と退役軍人の関係を描いた冒頭と終結部を比較し、冒頭は退役軍人 Eto が No-No Boy だと判明した Ichiro に唾を吐きかけるという明らかな対立構図であるのに対して、終結部では No-No Boy の Freddie の事故死を目撃した退役軍人 Bull が涙し、それを Ichiro が慰めるという点を例示し、No-No Boy と2世の退役軍人を対照させるという論理は、小説 *No-No Boy* にはあてはまらないと述べる (Sumida, 35)。その上で Sumida は、“The Nikkei in *No-No Boy* are all victims”と結論づける (Sumida, 43)。

確かに小説の最初の部分では、Ichiro と Freddie という2人の No-No Boys は、共に人生の敗北者として描かれる。Ichiro は、Eto に唾をかけられ黒人

3 *No-No Boy* の作者の John Okada は Idaho 州 Minidoka のキャンプに収容されていたが、作品中で触れられる Ichiro の収容時のエピソードの中で、“He recalled how he'd gone to a church in Idaho”とあるところから、Ichiro が収容されていたのもこの Minidoka キャンプと考えられる (Okada, 229)。Takezawa によると、Minidoka は日系人収容所中最も平穏なキャンプのひとつで、軍に志願した若者の数も最も多く、このキャンプの No-No Boys は、上述の Tule Lake には転送されなかった (Takezawa, 97-100)。小説 *No-No Boy* でも、Tule Lake への転送という記述はない。Ichiro は、Minidoka から直接法廷に送られ、ここで“disloyal”と判断されて刑務所に入ることになったと考えられる。

集団に擲擧され、家に戻ってもそこは自分を理解し受け入れてくれる環境ではなく、“It was a prison of forever.”と感じる (Okada, 40)。共感を求めて訪れた Freddie は、アパートでごろごろ時を過ごし、隣室の人妻と肉体関係を持つ事で欲求不満を解消するなど、自暴自棄的な生活を送る。しかし、そんな Freddie にながかりした Ichiro が、復学する意志を持って大学を訪れる場面以降は、“disloyal American”の烙印を押された No-No Boys のみが“victims”でないことが判明してくる。

大学に着いた Ichiro は、Baxter Brown という旧知の教授の研究室を訪れる。この教授は、Ichiro のことをよく覚えていると言いつつ名前を混同し、日系人である彼を見て彼がヨーロッパ戦線で戦ったと思ひ込み、Ichiro が言葉の濁していることにも反応することなく、“nice seeing you again. Drop in any time.”と手を差し伸べる (Okada, 56)。これに対して Ichiro は、“He was nice enough . . . Still, it was wrong. It was like meeting someone you knew in a revolving door, you going one way and the friend going the other”と感じる (Okada, 57)。Ichiro はここで、Mr. Brown の nice な態度をどこかよそよそしく感じる原因は、自分が No-No Boy だからだと思っており、読者もそのような印象を受ける。しかし、Ichiro は No-No Boy であることを打ち明けておらず、Mr. Brown がそのことに気づいているとも思えない。もし Ichiro が退役軍人だとしたら、Mr. Brown の態度はどのように変化したであろうか。Ichiro の名前を他の日系人と混同するという事実からも察せられるように、彼は戦後研究室を訪れる日系二世の男子学生すべてに同じ言葉をかけていたのではないか。即ち、彼は、Ichiro Yamada という個人ではなく、“Japanese”あるいは“Japanese American”という民族集団の一員としてしか Ichiro を見ていない。Yamada でも Suzuki でも Tsuji でも、日系人一人一人を他者と差異のある個人として接することがこの教授にできるのだろうか、という疑問が残る。彼は、戦時中の日系人の苦境に同情し、復学したら誠意をこめて彼らを教育しようという

善意の持ち主であるが、日系人の立場や問題の本質に踏み込んでそれを理解しようとは努める人物であるとはいえない。

Mr. Brown にも失望した Ichiro が次に会おうのは、退役軍人の Kenji である。イタリア戦線で戦い片足を失った Kenji は、Silver Star の栄誉を受け、政府からの保障により高価な新車を与えられ、GI Billのおかげで大学に復学することもできる。Ichiro は、健康な身体を持っていても将来への期待が閉ざされている自分を、片足を失い、そう遠くない将来に命までも失うことになりそうではあるが、国のために戦った英雄として社会に受け入れられ、物質的にも満ち足りた Kenji と比較し、Kenji と入れ替わりたいと望む。Ichiro の物質的満足への欲求は、これ以前に、息子のイタリアでの戦死によって持ち家を手に入れた Kumasaka 夫妻を羨む場面にも表れている。対する Ichiro の母といえは、わずかなバス代を浮かせるために1時間かけて坂道を往復して店で売るパンを買いに行く。貧乏な1世の苦勞を知る2世にとって、金銭を得て物を所有する事が成功であり、幸福であるという認識がある。しかし、服役していたという履歴がある以上、Ichiro にはその道が閉ざされ、苦勞して働いた両親に報いることもできない。

しかし、Ichiro は、後に Kenji と Portland に行き、善意ある白人 Mr. Carrick と出会った頃から、物質を所有する経済的満足がすべてではないことに気づき始める。Mr. Carrick の事務所を出て、日系の退役軍人が働くカフェで軽食をとった後の場面でも、Ichiro は、物質的な幸福を夢に見る。彼は、雑誌にあるようなガレージつきのきれいな家に家族と住んで新車を持ち、ペットを飼うことに憧れるが、“Surely it must be around here someplace, someplace in America. Or is it just that it's not for me?” と、No-No Boy の自分にはそれは不可能だと諦める (Okada, 159)。しかし、カフェにいた退役軍人も白人の Mr. Carrick さえも決して裕福ではなく、その“someplace”には入れないことに気づく。結局 Ichiro は、そんな場所は実在しないのにみんな存在すると思ってそこへ入ろうと押し合いへし合い争っ

ていることが問題で、そういう“pushing and shoving and screaming”をやめたら“the outside could be inside”となって、みんなが満足できるのではないか、と感じるようになる (Okada, 160)。

前述の Sumida の指摘どおり、Kenji, Bull, Eto など、作者 Okada と同様国のために志願して戦った退役軍人達も、その家族もまた、必ずしも精神的に満ち足りた生活を送っているわけではない。何よりも、Kenji や Kumasaka 家の物質的幸福は、身体や命という大きな代償を払った結果として与えられたものである。Kenji は物質的には裕福で、理解のある父親との幸せな家庭を持っているが、“loyal American”として国から与えられた名誉と物質的幸福と引き換えるように、傷の適切なケアを受けることもかなわず命を落とす。Bull や Eto は、戦争に行かずに投獄された Ichiro や Freddie を軽蔑することにより優越感を覚えるが、日系人社会の閉じたコミュニティの外に出ることはできない。Kenji は、たとえ“loyal American”として軍に入隊し、アメリカのためにナチスドイツと戦っても、Jap は Jap としてしかみなされないという厳しい現実を認識している。彼の脚が少しずつ腐って行き、少しずつ切り取られるという残酷な事実が示すように、彼が白人であればもっと手厚いケアが施されたかもしれないという可能性、そしてそれを示して抗議できずに沈黙する彼のいら立ちが感じられる。彼は、コミュニティに閉じこもり、外へ出ようとしない日系人社会を批判し、同じ日系人同士でいがみ合い、おなじマイノリティの黒人を差別する日系人社会に深い嫌悪を抱き、人種の区別のない“only people”の社会を希求する (Okada, 163-164)。

再び Ichiro 自身の意識に目を向けると、No-No Boy の彼が、Bull や Eto のような退役軍人や、これから軍人になろうとする弟の Taro を憎悪しながらも、完全に敵視しているのではないことがわかる。Eto は Ichiro に唾を吐きかけ、Bull は Ichiro を公然と揶揄し、No-No Boy の兄を恥じる Taro は、酔っぱらった兄を呼び出して、友達と共に暴行を加える。これらの言葉や身体による暴力に対し、Ichiro は強く抗うことはしない。不名誉ゆえに孤

立した彼を排除しようと作用する多数派の圧力が彼に沈黙を強いるのは事実である。しかし、反面、Ichiroの方も、その圧力が不当とわかりながらもそれを跳ね返すことはなく、不幸を招いた原因は自分にあるのだと心の中で自嘲する。なすすべもなく Taro 達の暴力を受け、Kenji に救ってもらった Ichiro は、次のように思いを巡らせる。

I was born not soon enough or not late enough and for that I have been punished. It is not just, but it is true . . . I have made a mistake and I know it with all the anguish in my soul. I have suffered for it and will suffer still more. (Okada, 81)

彼は、自分が罰せられたのは“not just”であると認めつつも、それが“true”であり、従って自分が兵役につかなかったのは“mistake”だったと結論づける。No-No Boy はアメリカの敵だと二分法で断じることができる Taro と、軍人は No-No Boy の敵だと割り切れない Ichiro の違いがここにある。

### 3) 1 世 / 2 世

戦争中のキャンプ収容に加えて新兵募集と loyalty questionnaire が日系人の家族を分断したということは前に述べた。主人公 Ichiro の家庭は、その分断の典型例であるといえる。互いに協力して苦難を乗り越えるという移民の stereotype にはほど遠く、物質的には困窮していないものの、敵意と緊張に満ちた環境である。Ichiro が戻った家庭では、どこまでも“Japanese”であろうとする母と、あくまでも“American”としてアメリカ社会に受け入れられようとする弟 Taro との間で、熾烈な心理戦が繰り広げられている。そして日本や中国の家父長的 stereotype である、家庭では全権を掌握しているはずの父は、この険悪な状態をコントロールできず、酒に溺れて現実逃避をしている。Ichiro が戻って来ることで、この家庭は更に不協和音を響か

せることになる。しかし、この小説は、世代間の断絶状態のみを描くのではなく、Ichiro と父および Kenji と父の世代間関係の中に新たな日系移民家族像を形成していく。

小さな食料品店を細々と営む小柄で太った Ichiro の父は、常に笑顔を浮かべ、周りの人間を気遣い、もの静かで寛容な “benevolent Buddha” のような人物として描かれる (Okada, 9)。しかし、彼の寛大さは、頑迷な妻に日本の敗戦という現実を受け入れさせる事も、Taro に入隊することを思いとどまらせることもできない。彼のソフトな属性は、アジア系の stereotype である頑固な権力者としての父親ではなく、むしろ父の背後で子供達を優しく見守る母親のそれに近い。彼は “I am sorry that you went to prison for us.” と Ichiro を気遣い (Okada, 38)、次々と日本の窮状を嘆く手紙が来ても日本の敗戦を信じない母に関しても、 “Your mama is sick”, “It is not for me to say that she is wrong even if I know so.” (Okada, 37) と、あくまでも彼女の信念を否定せずに見守っている。母に対して強い態度に出ない父に対して、Ichiro は歯がゆい思いをし、時に “You’re a Jap . . . . You’re nothing . . . . Goddamn fool, that’s what you are, Pa, a goddamn fool.” (Okada, 115) などの激しい言葉を吐く事もあるが、概して父とは互いに相手の気持ちを気遣いながら穏やかに話す傾向がある。

*No-No Boy* の中で一種のアジアの stereotype が現れるとすれば、それは Ichiro の母である。痩せた身体とその頑固さから “tough bamboo” に例えられる彼女は (Okada, 20)、家族をすべてコントロールしようとするアジア的頑固親父の役割を演じているといえる。息子によってしばしば “crazy” と非難される彼女の狂信的ナショナリズムは、戦時中アメリカ社会が一般的に抱いていた危険な “Jap” の stereotype であろう。帰宅した Ichiro を出迎えたのは父であるにもかかわらず、Ichiro が最初に持ち出すのは不在の母の話題であり (“Where’s Ma?”)、Ichiro にとっては母が実質上は家長的存在であると察せられる (Okada, 7)。柔和でいつもにこにこ笑っている父と



は対照的に、母は決して笑みを浮かべることのない頑固な“rock”のような存在として描かれる。

Pa's okay, but he's a nobody. He's a goddamned, fat, grinning, spineless nobody. Ma is the rock that's always hammering, pounding, pounding, pounding in her unobtrusive, determined, fanatical way until there's nothing left to call one's self.

(Okada, 12)

彼の母は、アメリカという単一価値しか認めないアメリカ政府と同じように、日本という単一価値しか認めない日本人である。どんなに日本を愛していても、自分が住んでいるのはアメリカであり、息子達は将来アメリカ社会で生きていくという現実を頑として認めない彼女は、軍に入り“American”として受け入れられるという Ichiro の選択肢の上に、大岩のような障害物となって立ちふさがったのであった。

刑期を終えてからも Ichiro は、母を憎みながらも彼女に強く意見することはできない。息子が、日本に対する愛国心から No-No Boy になったと信じている母は、彼を誇りに思い、同郷の知人宅に連れて行く。Ichiro は、母のことを“the woman who was only a rock of hate and fanatic stubbornness and was, therefore, neither woman nor mother”と感じながらも、それを口にする事なく母の後ろについて行く (Okada, 21)。知人の Mrs. Ashida と母が日本の敗北を伝える 2 世を批判しても、Kumasaka 夫妻の息子の戦死を知りながら、自分自身の息子を連れて訪問するという母の無神経に気づいても、Ichiro は不快感を示し、“crazy”と非難するものの、反論はしない (Okada, 14, 42, 43)。

そんな彼が唯一母に従わない場面がある。それは、アメリカのために戦った Kenji にもう会わないで (“You can be a good boy, a fine son. For my sake and yours do not see him again.”) という母の意に反して、“I'm going to Portland with him tomorrow.”と返すところである (Okada, 103-

104)。これが二人で交わす最後の会話となり、次に Ichiro が母と会うのは母の自殺を発見する場面である。Taro が軍に入ることを止められなかったということと、妹の手紙により日本の敗戦を確信したことが母の自殺の最大の原因であったとしても、Ichiro が母の反対を押し切って Kenji と出かけたことが彼女の自殺の引き金となったことは否めないだろう。

しかし、Ichiro は、弟とは異なり、母を“Jap”として単純に切り捨てることはできない。Ichiro は、自分が No-No Boy になったのは、母と戦えるほど強くなかったからだ (“I was not strong enough to fight you.”) と振り返る (Okada, 16)。しかしその一方で、軍に入らなかったのは母のせいではなく自分の弱させいだという。

I did not go because I was weak and could not do what I should have done. It was not my mother, whom I have never really known. It was me, myself. It is done and there can be no excuse. (Okada, 34)

ここにも Ichiro の自責の傾向が表れる。彼が No-No Boy になった真の理由は、彼の母が考えるような、あるいはアメリカ政府が考えるような、日本に対する忠誠心やアメリカへの敵対心という単純な二分法を越えたところにある。他の多くの二世同様、自分が生まれ育っているアメリカが自分の国であるという感覚は彼の中にあるが、日本という国に対してはほとんど知識がなく、たとえ両親の国であってもそのように非現実的な国家に忠誠心を持つことはできなかったのである。

Ichiro は、幼い頃に “a mother’s smile” を浮かべた母が桃太郎などの民話を語り聞かせてくれたことを覚えている (Okada, 15)。そして、母の反対を押し切って Kenji と共に Portland に向かう決心をした後も、“guilty” に感じ、“Right or wrong, she, in her way, had tried harder than most mothers to be a good mother to him.” と母を思い遣る。そして、母がこ

れほど信奉する日本がどのような国であるのか、そんなに素晴らしい国であれば何故その国から出て移住したのか、知りたいという思いに駆られる。

Tell me, Mother, who are you? What is it to be a Japanese? There must have been a time when you were a little girl. You never told me about those things. Tell me now so that I can begin to understand. (104)

Ichiro は、父に対しては “What made you and Ma come to America?” と問いかけるが (Okada, 19), 母に日本のことや渡米について直接尋ねることはないため、上のような質問に答が得られることもない。

日本にいた頃の若き母について、Ichiro には知らされないが、実は読者にもみ知らされる事実がある。それは、Ichiro が不在の家にいる父の回想の中に出てくる。この小説は主として Ichiro の視点で語られるが、Ichiro が不在となる場面が2カ所あり、そのひとつがこの場面である。バスルームに籠った母を気遣いながら酒をあおることしかできないこの場面での父は、妻との見合いの時を思い出し、Kin-chan と呼ばれていた頃の彼女に頭の中で語りかける。父の回想の中の Kin-chan はごく普通の若い日本人女性であり、二人は見合いの日にかっそりと肉体関係を持ち、事実上夫婦となる。Ichiro の父が唯一「男性的」になり、母が「女性的」になる唯一の場面がここであるが、若き日の二人のこの姿は、Ichiro に知らされることはない。そして皮肉な事に、Ichiro と Taro という2人の男子がアメリカという異国の地に生を受ける原点となるこの出来事について、父が回想に耽るその同じ家の中で、母が自らの命を絶とうとしているのである。生物学的なつながり以外に接点の少ない父と Ichiro であるが、父の回想の中には二人の意外な共通点が隠されている。父と母が出会ったその日に肉体的関係を持つという点では、Ichiro と Emi の関係と重なるのである。しかし、その偶然の一致にも、Ichiro が気づくことはない。

現実から目を背け、日本が戦争に勝ったと信じて疑わない頑迷で偏狭なナショナリストの母と、彼女を説得することもできず、酒に逃避する父は好対照として描かれる。そんな両親を Ichiro は、“his [i.e. Pa’s] weakness is just as bad as Ma’s strength . . . He should have been a woman. He should have been Ma and Ma should have been Pa.” と評する (Okada, 112)。しかし、この偏狭なナショナリストの母が、形式的な家長の父ではなく母であること、そしてその体型が、“the awkward, skinny body of a thirteen-year-old which had dried and toughened through the many years following but which had developed no further” (10) と貧弱であることから、その “strength” の脆さを象徴しているといえよう。他方、どんなに弱く頼りない “nobody” に見えようとも、父は食料品店の店主であり、料理をするなど生活能力もある。妻の死後、彼が経済的にも精神的にも大きな打撃を受けることはなく、妻の死後の方がむしろ生き生きとしている。母の生前は酒が手放せなかった彼であるが、葬式が終わると、酒の力を借りず、親族に送るためにとりまとめていた物資をさっさと荷造りして日本に送ろうとする。寂しいかと息子に聞かれて、“Mama was not well. It is better this way.” と答える (Okada, 211)。母が残した貯金は店の改装資金に充てることに決め、“I meant only to say that one must live in the real world. One must live naturally, not so? It is not always a happy life but, sad or happy, it can be a good life.” と語る (Okada, 212)。Ichiro 父子の関係も母の死後良好になる。出所当初は当然のように父から遊ぶ金を受け取っていた Ichiro であるが、母の死後は、金を差し出す父に対して、もう子供ではないからいつまでも金をもらうわけにはいかないと遠慮する。それでも父は、“Pretty soon you will get a job” と金を渡し、Ichiro と自分の二人でこれから何とかやっつけようと言語りかける。息子の方も、当座は店を手伝おうと提案する (Okada, 236-237)。

父の回想の他に、小説の中で Ichiro が登場しないもうひとつの場面は、

Kenji の入院の前日、彼が自宅で父と姉たちとその家族と夕食を共にし、そのあとひとりで Club Oriental へ行くところである。Kenji は父に “We’re buddies, aren’t we?” と言い (Okada, 123), Ichiro に対しても “My dad is one swell guy. We get along.” と誇るように (Okada, 138), 崩壊した Ichiro の家族とは対照的に、Kenji と父の関係は良好である。しかし皮肉にも、その関係を可能にしたのは彼がアメリカ軍として戦い、重傷を負ったからであり、その傷のために彼は間もなくこの世を去ることになる。Kenji の父もまた、Ichiro の父と同様、部屋に一人になった時、回想に耽る。しかし、Kenji の父の回想は、日本のことではなく、キャンプに収容されていたときのことである。彼は、この時 1 世たちにもかって、たどたどしい日本語で、日本人であってもアメリカに住む子供達のことをもっと理解し、子供達の “companions” になるように変わってほしいと訴えた 2 世の社会学者のことを思い出す。この講演の後、それを非難した 1 世もいたが、それまでアメリカを悪く行っていた 1 組の 1 世のカップルが、2 世の若者たちのダンスをずっと見ていたことを Kenji の父は覚えている (Okada, 125)。この講演が彼自身にも強いインパクトを与えたことは、息子から “We’re buddies” という言葉をかけられるという事実が証明するであろう。Kenji の父の回想シーンが小説の中で蘇る場面がある。それは、終盤近くで、Ichiro と Emi がダンスを踊っているのを見ていた 1 世とおぼしき男性が、“I saw you and want to buy you both a drink.” と近づいて来る場面である (Okada, 210)。Ichiro が探る 1 世と 2 世の間をつなぐ鍵がここにも示されるが、それを知るのは Ichiro ではなく読者のみである。

#### 4) Ichiro に希望を与える人々

当初は絶望のあまり自分を責める Ichiro であるが、様々な人々と交流するうちに希望を見出し、徐々に前向きに可能性を模索するようになる。そん

な彼を支えた人物の一人が Kenji である。彼は、退役軍人としての名誉を驕ることなく、No-No Boy の Ichiro を友として受け入れる。死の床で彼は、Ichiro に、日系人だけで固まった閉鎖社会への嫌悪を吐露し、Ichiro はそんな社会から外へ出て、日本人以外の女性と結婚するといいと意見する。

Kenji の友人 Emi も、Ichiro を絶望の淵から救う重要人物である。彼女の夫 Ralph は軍に志願するが、キャンプ収容に怒って日本に行った兄を恥じ、第2次世界大戦後も兵役を延長して、戻る見込みはない。Emi は、Ichiro の母とは対照的に、魅力的な若い日本人女性で、出会ったその日に Ichiro と一夜を共にするが、従順でおとなしい stereotype のアジア人女性ではなく、主体性を持った強い人物である。彼女は自分を責めてばかりで自虐的になっている Ichiro を “A hopeless feeling, however, doesn't mean that there is no hope.”, “You're young, healthy, and supposedly intelligent. Then be intelligent. Admit your mistake and do something about it.” と叱咤激励する (Okada, 95)。自分の中の否定的な面にしか目を向けていなかった Ichiro はここで、自分には若さも健康も大学で得たエンジニアリングの知識もあるという肯定的な面に気づかされる。更に Emi は、これまで自分の選択が “mistake” で、国から見捨てられたと思い込んできた Ichiro に、全く異なる視点を呈示する。

In any other country they would have shot you for what you did. But this country is different. They made a mistake when they doubted you. They made a mistake when they made you do what you did and they admit it by letting you run around loose. Try, if you can, to be equally big and forgive them and be grateful to them and prove to them that you can be an American worthy of the frailties of the country as well as its strengths. (Okada, 97)

Ichiro が “mistake” を犯したと同様、国も Ichiro に対して “mistake” を

犯し、国は Ichiro を許したのだから Ichiro も国を許したらいいではないか、と Emi は言う。彼女は、アメリカという国に認めてもらうかどうかという点に偏った Ichiro の視点ではなく、主体的にアメリカという国を認めるかどうかという視点に立っている。

*No-No Boy* には日系人以外の人種も登場し、重要な役割を果たす。Ichiro を差別したり彼に敵対したりする者も少なくないが、狭い日系人社会の中で疎外される Ichiro に希望を与える白人や黒人も登場する。

Ichiro が Portland で出会う白人 Mr. Carrick は、Ichiro の過去を問わず、彼が *No-No Boy* だとわかっていても彼を雇おうとする。彼の優しさは Ichiro に希望を与え、この白人は人間味あふれる寛大な人物のように描かれる。ただし、彼が Ichiro の履歴を問わずに採用を決めた最大の理由は、Ichiro を個人として評価したからではなく、彼が日系人だからである。Mr. Carrick は、以前個人的に日系人を知っており、その人物がいい人だったため、*No-No Boy* であろうが退役軍人であろうが、日系人はすべて善人という先入観を抱いているといってよい。即ち、日系人を個々人ではなく集団の単位のみで見るという判断基準は、戦後復学しようとする日系人学生に接する大学教授の Mr. Brown の「善意」と大差ない。それでも、Mr. Carrick の存在は、その後の Ichiro に意欲を与えたのは事実である。

Ichiro が Seattle にもどって職探しに訪れる Christian Rehabilitation Center の Mr. Morrison は、Mr. Brown と同 Mr. Carrick と異なる接し方をする。彼は、Ichiro の話を聞き、すでに職を紹介したことのある Gary と同じ *No-No Boy* であることを知る。最終的には彼は安易に職を与えず、“Youth, intelligence, charm, a degree in fine arts, health—he [i.e. Gary] got everything. So have you.” と、自分で努力して可能性を開くことを促しながら、とりあえず Gary と仕事をしてみてはどうかと提案する (Okada, 220)。彼のこの対応は、Ichiro が *No-No Boy* だとわかるのもっともらしい理由をつけて厄介払いしようとしているような印象を与えるが、彼

が Mr. Carrick と異なるのは、Ichiro の話を全て聞いてから判断している点である。彼は Mr. Carrick や Mr. Brown のように、“Japanese” という集団的見方を越えて、個人として Ichiro に接している。その上で、この若者が可能性を模索していることを察知し、寛大な白人として彼に職を与えてやるのではなく、彼自身に道を切り開かせようとしていると考えられる。

*No-No Boy* に登場する黒人は、多くの場合、白人に差別された日系人から差別される存在として現れるが、Ichiro と同じ *No-No Boy* の Gary の話に出てくる Birdie という黒人は例外である。Gary が出所後に就職した工場の同僚 Birdie は、職場の中で孤立した Gary を命がけで守り、その結果自分もいじめを受ける。最終的には Birdie を思い遣った Gary が退職することになるのだが、Gary は Birdie のことを “He was suffering for me, really suffering. There’s still plenty of good people around, you know.” と評し (Okada, 226), Ichiro に希望を与える。Gary 自身もまた、Ichiro に新たな可能性を示す人物である。自分の運命をすべて静かに受け入れる穏やかな孤高の芸術家タイプの彼は、全てを否定・破壊し、常に何かに怯える Freddie の好対照である。刹那主義の Freddie とは異なり、Gary は、“Later on, things will soften down.” という長期的視野を持つ。Ichiro の “You really think there will come a time when what we’ve done will be forgotten?” という問いに対して、“I didn’t say that. They’ll forget. Some of the guys who have it real tough might even envy us secretly. Time will make them forget, but I’m not so sure that we will” と答える (Okada, 277)。たしかに、Ichiro が刑務所を出てからまだ1週間も経過しておらず、絶望するにはまだ早いのである。

## 5) 新たなヒロイズム

本論の前半で述べた、アジア人の従順な model minority としての stereo-



type から、アメリカ文化の中でアジア人は全体としてしばしば女性化された (feminized) 集団として見なされる。女性化されるということは、同時に、主流に合流できないということの意味する。60年代の公民権運動や女性解放運動を通して、黒人男性や白人女性が白人男性という主流に合流し始めた後も、アジア系の男性は、自律的な masculinity (男性性) を奪われ、主体的になれない依存的な女性として認識されてきた。この傾向は、しばしば、アジア系男性の “emasculatation” と表現される。No-No Boy でも、家長である Ichiro の父には女性的な性格が与えられ、日本的な masculinity のイメージは経済的に父に依存する母によって演じられ、しかも彼女の “strength” は家族からさえ “crazy”, “sick” と排除される。この1世の夫婦は、アメリカ社会で自己の権利を主張することができるはずもなく、アメリカを否定する力は自殺という形で、国家が手を下すことなく排除される。また、Kenji が批判するように、次世代を担う2世もまた自己のコミュニティの中に閉じこもって孤立することで、支配的な白人社会からの距離が更に関き、いつまでも女性化された集団として周辺に追いやられる結果となる。

Ichiro という主人公は、日本人であり、前科者であり、自分を責めるだけで主張することのない、一見 emasculate されたアジア人男性の典型である。母の狂気に立ち向かうこともできず、あまりつき合いたくもない Freddie の誘いを断ることもできず、せつかく雇用の機会を与えられても遠慮するなど、終始優柔不断な性格の持ち主として描かれている。しかし、彼の優柔不断は、同時に彼が思慮にかけける時間の長さを示し、彼が No-No Boy となったのも、判断の重要性を認識し、迷っているうちに時間切れとなった結果と考えられる。重要な選択に際しても即断を求め、しかもその判断がすべてであるというアメリカ社会に、Ichiro という人物は疑問を投げかける。彼の迷いは、Freddie と同様の非選択というニヒリズムなのか、それとも、思慮深さという美徳なのか。

Ichiro は、最後に、Freddie と争う Bull に立ち向かい、屈服させる。この場面の Ichiro は、Taro 達の暴力になすすべなく屈服した出所当初の彼と対照的で、攻撃を受けても無抵抗で沈黙するという、それまでの弱い emasculated なイメージを払拭する。読者はここで Ichiro が、stereotype のひ弱なアジア人男性ではなく、“Japanese but who had been big enough for football and tall enough for basketball in high school” であり、体格がよくてスポーツマンだという事実気づくのである (Okada, 7)。父や Emi や Mr. Morrison からそれまでに指摘されてきたように、彼は若くて健康で、体力もあり、彼にはまだまだ可能性がある。しかし、作者は、主人公を勧善懲悪のハリウッド映画のようなヒーローに描くことはない。Bull を組み伏せながら Ichiro が発するのは、勝利の雄叫びではなく、“Please, don’t fight” という叫びである (Okada, 247)。勝負が決まった後、Ichiro と Bull は盃を交わすが、Freddie の死を知らされる。それに対して Ichiro は、“I’m sorry.” と言い、Bull は毒づきながらも赤子のように泣き崩れる (Okada, 250)。この結末は、“Yes” と “No” しか答を認めず、それによって敵か味方かを分ける分断法、ひいては、二者が “fight” し勝者が強者として勝ち誇り敗者が弱者として駆逐されるという二分法的価値観への挑戦であるといえる。

小説は、頼りないながらも希望を含んで締めくくられる。

A glimmer of hope—was that it? It was there, someplace. He couldn’t see it to put it into words, but the feeling was pretty strong.

He walked along, thinking, searching, thinking and probing, and, in the darkness of the alley of the community that was a tiny bit of America, he chased that faint and elusive insinuation of promise as it continued to take shape in mind and in heart. (Okada, 250-251)

ここでの“someplace”は、IchiroがPortlandにいる時に思い描いた“someplace”（Okada, 159）とは少し異なる。これまでIchiroが憧れてきた幸福とは、強者として勝ち得た金で手にした物質的幸福だったが、それは弱者の不幸の上にあぐらをかいた幸福である。しかし、出所後の失意の日々の中での様々な人々との出会いを通して、彼は、共に苦悩する他者と共に涙し共存する相互扶助の上に築き上げる幸福の可能性を垣間みるのである。そして、Kenjiの言うようにSeattleから離れなくても、日系人社会と訣別しなくても、その幸福の実現が、Seattleのこのコミュニティで可能ではないかという含みを持たせて、この小説は終わる。

*No-No Boy*にもあるように、2世は1世の過去を知りたいと思うが、1世はそれを語らなかつた。多くの2世もまた、収容所や刑務所に入ったということで、戦時中や戦後の苦しい体験を恥じ、自己の過去について後の世代に対して沈黙した。John Okadaは勇気を出してその思いを語ろうとしたが、彼の生前に*No-No Boy*の提起する問題点にアメリカ社会の反応はなかつた。しかし、3世の時代になって、この作品は評価されるようになる。70年代以降、3世は、沈黙していた2世の口を開き、戦時中の政府が日系人にしたことについての補償運動（Redress Movement）を進めていく。*No-No Boy*の舞台Seattleは、その運動のパイオニアとなった地であり、この作品を発掘したLawson InadaやFrank Chinも、この運動に一役買った。日系アメリカ人が最も振り返りたくない過去を直視し、“Japanese”でも“American”でもない“*Nikkei*”という新たなアイデンティティを模索したこの小説は、静かなメッセージとなって、次世代への“glimmer of hope”を発したといえよう。

#### 引用文献

Chin, F., Chan, J. P., Inada, L. F., & Wong, S. H. (Eds.). (1974). *Aiiieeee!: An Anthology of Asian-American Writers*. Washington, D.C.: Howard University Press.

- Kitano, Harry H. (1986). The Effects of Evacuation on the Japanese Americans. In R. Daniels, S. C. Taylor, & H. H. Kitano, *Japanese Americans: From Relocation to Redress* (pp.151-158). Seattle: University of Washington Press.
- Ling, Jinqi (1995). Race, Power, and Cultural Politics in John Okada's No-No Boy. *American Literature*, 67 (2), 359-381.
- Okada, John (1957/1976). *No-No Boy*. Seattle: University of Washington Press.
- Sumida, Stephen H. (2007). No-No Boy and the Twisted Logic of Internment. *AALA Journal*, 13, 33-49.
- Takezawa, Yasuko I. (1995). *Breaking the Silence: Redress and Japanese American Ethnicity*. Ithaca: Cornell University Press.
- Yogi, Stan (1997). Japanese American Literature. In K.-K. Cheung, *An Interethnic Companion to Asian American Literature* (pp.125-155). Cambridge: Cambridge University Press.